

鳥取市長

深澤義彦



中心市街地のにぎわい創出へ

市長対談

山陰の中核都市として地域をけん引する鳥取市と松江市。鳥取市の深澤義彦市長と松江市の上定昭仁市長が「中心市街地に人が集い、歩いて楽しむまちへ」をテーマに鳥取市役所本庁舎コミュニティチャンネルスタジオ（鳥取市幸町）で対談し、賑わいづくりの取り組みや、まち歩きの仕事掛けについて語り合いました。



松江市長

上定昭仁



人が集い、歩いて楽しむまちへ

駅と城跡を核に まち歩き

深澤 今年度は第4期鳥取市中心市街地活性化基本計画（5年間）の初年度であり、アフターコロナの時期を迎え、これまで以上にウォークアブルなまちづくりで賑わいを創出するための様々な取り組みを進めています。対象となる中心市街地は約210ヘクタールで、「鳥取駅周辺エリア」と「鳥取城跡周辺エリア」の二つを核とし、この二核をつなぐエリアをまち歩き推進ゾーンとしています。

特に「鳥取駅周辺エリア」の再生は長年の課題であり、第2期鳥取駅周辺再生基本構想（令和3年度から10年間）にも位置付けている取り組みでもあります。

鳥取駅は本市をはじめ麒麟のまち圏域（鳥取県東部と兵庫県北部）の交通・交流の拠点となっていて、多様な交通手段の確保も大きな課題です。次の50年を見据えた新しいまちづくりの拠点として、鳥取駅周辺を最適化し、中心市街地全体への回遊性・滞留性の向上を図りたいと考えています。

具体的には8月21日に国や県、交通事業者、経済団体と連携し、「鳥取駅周辺リ・デザイン会議」を立ち上げました。今年度中をめどに駅周辺のにぎわい創出や、交通の拠点としての課題解決に向けた整備の方針やイメージを示す予定です。

このエリアでは、駅北のケヤキ広場と民藝館通り、駅南の鳥取鉄道記念公園を周遊の起点として賑わいづくりを進めています。ケヤキ広場ではJR西日本と連携し、芝生スペースやミニ遊具、歩道空間を活用してテラス、イスを設置し、皆さんにくらりいでもらう実証事業を行いました。また、鳥取鉄道記念公園周辺では昨年度に引き続き、賑わい・憩い・交流の場としての再整備に向けた実証事業を実施しました。民藝館通りには、日本初の民芸品販売店と言われる「鳥取たくみ工芸店」や民芸品を用いた料理店「たくみ割烹店」、鳥取民藝の父と呼ばれる吉田璋也が設計・経営した「旧吉田医院」があります。こうした固有の地域資源を大切に、情報発信しながら、インバウンドを含めた交流人口の拡大につなげていく取り組みが始まっています。

職人の技 観て体験して楽しんで

上定 松江市では、中心市街地に活気を取り戻そうと、「職人商店街」の形成に取り組んでいます。昨年度、職人の技を観て体験して楽しむことのできる店舗へのリノベーションを支援する制度を創設しました。これまでに、この補助金を使って、山本漆器店、彩雲堂、風流堂、そば処玄の4店舗がリニューアルオープンしました。また、経済産業省・中小企業庁の「地域商業機能複合化推進事業」を活用し、本市からの助成も得て、元呉服店が動画撮影スタジオやレンタルオフィスを備える多機能施設に、老舗仏具店がビール醸造所やシェアキッチンなどから成る複合施設に、それぞれ生まれ変わっています。こうした拠点を相互に「なご」の回遊性を高めていく計画です。

店舗改修などのハード整備に加えて、ソフト面では今年度、地元商店街組合や商工会議所などを中心とする実行委員会が、およそ30年ぶりに市街地中心部での「土曜夜市」を復活させました。6月から10月まで5回にわたって開催し、既存店舗に加えて屋台、キッチンカーなど各回50〜60店舗が出店しました。初回は2万人の出入り、5回合わせて8万1千人にお出掛けいただき大変好評でした。土曜夜市の開催に当たって、空き家・空き店舗へのテナント出店を促すため、あらかじ

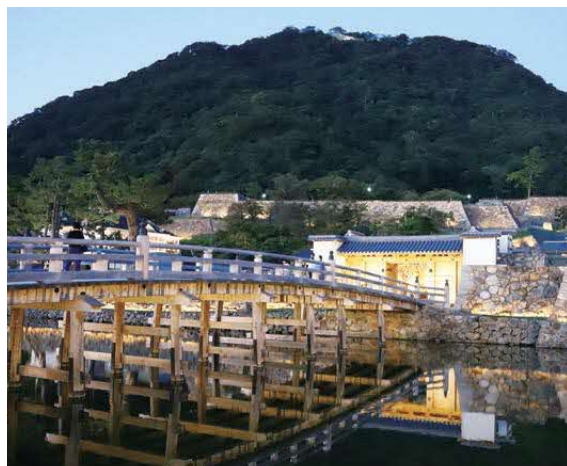
め建物所有者と出店希望者のマッチングが行われました。土曜夜市をきっかけに、意欲のある個人や事業者の出店による地域経済の活性化と、市街地の空洞化や空き家への対策が同時に進むことを期待しています。

さらに、中心市街地の活性化に向けた民間ベースの動きが加速しています。松江市は、今年11月に山陰で初めて、まちづくり会社「株式会社まつくる」を都市再生推進法人に指定しました。都市再生推進法人とは都市再生特別措置法に基づき、地域のまちづくりや行政の補完的機能を担う法人を市町村が指定するものです。まつくるは、土曜夜市で実行委員会の事務局を担ったほか、公共空間や水辺を活用したイベントの企画などに積極的に携わっています。民間事業者や市場のニーズを的確に捉えて、機動的なまちづくりが進められるよう、連携・協力を図ることにしています。

鳥取城二ノ丸三階櫓復元へ

深澤 鳥取城跡は本市の誇れる歴史的資産であり、今、復元整備を進めています。平成30年に擬宝珠橋、令和3年には大手門の表門が完成しました。現在は令和7年の完成を目指して大手門の渡櫓門の復元工事中です。最終的には二の丸三階櫓を含む幕末期の鳥取城を復元する計画です。多くの方の賛同と支援を得ようと、10月2日からクラウドファンディングを実施しています（12月31日まで）。

賑わいづくりに向けて、さまざまな取り組みも行っています。令和4年9月に初の実証実験として、鳥取城跡のライトアップを実施し好評でした。本年度は7月から11月まで行い、期間中に「鳥取城跡ときめきマルシェ」を開催したほか、9月には毎年恒例の「鳥取三十二万石お城まつり」を行い、大変にぎわいました。特に「お城まつり」では、AR（拡張現実）で復元した鳥取城二の丸三階櫓をスマートフォンやタブレット端末を使用して見ることができ、イベントを実施し、多くの方に楽しんでもらえました。



松江城を世界遺産に

上定 松江市には国宝の松江城があります。天守を誇る山陰で唯一の城郭である松江城は、観光資源の中核です。城東側の家老屋敷跡地には松江歴史館があり、造成当時の掘割やまちなみが残る城下町の歴史を紹介するほか、同志社大学文化遺産情報科学調査研究センターと共同製作した、松江城天守を登閣体験できるVR（仮想現実）コーナーも設けています。

日本全国の国宝天守を有する5市が力を合わせて、世界文化遺産への登録をめざすと動き出しており、9月には、姫路市に5市長が初めて一堂に会して「国宝五城サミット」が

開催されました。令和7年に国宝指定から10年を迎えるに当たり、5市合同での記念イベントを企画したいと考えています。

加えて、松江を象徴する人気の観光資源として、堀川遊覧があります。この8月から本田技研工業株式会社、公益財団法人松江市観光振興公社と連携して、遊覧船の電動化をスタートしました。遊覧船は常時20艘くらい運航していますが、このうち2艘に「Honda小型電動推進機」を搭載し実証実験を行っています。温室効果ガスをまったく排出しなだけでなく、静粛性に優れているため水鳥のさえずりや虫の音を聴き入ることができ、松江市の脱炭素の取り組みの象徴となり、堀川遊覧の魅力がさらに高まるものと確信しています。



訪れる人が楽しめる 仕掛けづくり

深澤 鳥取市では中心市街地での回遊性を高めるため、100円循環バスを活用した観光ルートを造成するとともに、さまざまなイベントを同時開催するなど、ウォークアブル推進都市の実現に向けた施策をさらに強化していきたいと考えています。その一つとして、旧鳥取市役所本庁舎跡地で「食べる」「遊ぶ」などをテーマに毎月1回イベントを開催しています。みんなで中心市街地のにぎわいを創出する機運が高まることを期待しています。また、中心市街地での自動運転の実証事業も予定しています。若桜街道商店街では一部店舗のシャッターに「麒麟獅子」をモチーフにした影絵を投影したり、アーケードに提灯を設置したりするなど、夜間のまちなか観光を楽しんでもらう取り組みを11月に実施しました。

水辺と水上交通活用

上定 松江市では、新庁舎の整備に合わせて、市役所や松江しんじ湖温泉前の護岸、千鳥南公園の一体的な再整備を進めています。湖畔にはいくつも公園がありますが、県立美術館に隣接する岸公園では仮店舗だったサンセットカフェを常設化しました。民間事業者が水辺の公共空間を気軽に商業利用できるようにして、「水の都」と呼ぶのにふさわしい水辺の賑わいを創出してまいります。

合わせて、水面の利用にも着目しています。舟運で栄えた松江市は、宍道湖、中海、日本海につながり、水上交通による結節でまちの魅力が高められると考えています。今年3月には、中心市街地と美保関を結ぶ市民モーターツアーを実施し、水上交通の活用によって新たな松江の価値を発見できると実感しました。今年度は、玉造温泉とつなぐ試みを予定しています。商業化・旅行商品化できれば、市民のみならずにも楽しんでほしいですね。